

大田原赤十字病院におけるペインブロッカーポンプ調製について

○内藤 裕之¹, 新井 由季³, 佐藤 学¹, 鴨志田 武², 田村 華恵¹, 金森 麻土香¹, 加藤 直子³(¹大田原赤十字病院薬 緩和ケアチーム, ²大田原赤十字病院薬 がん薬物療法認定薬剤師, ³大田原赤十字病院 医師)

緒言：終末期における在宅医療でも、内服が困難で、かつ皮膚症状で貼布剤による疼痛コントロールが出来ない患者、複雑なオピオイド処方ではか管理できない患者も存在する。このような患者に対するペインブロッカーの需要は今後も増え続ける可能性が高い。そこでペインブロッカー調製に関する当院薬剤師の存在意義について検討した。

方法：当院薬剤部でペインブロッカーの調製に関わる薬剤師 3 名と緩和ケア担当の医師 2 名、緩和ケアチームと訪問看護師ステーション看護師 20 名を対象にアンケートを実施。また薬剤師業務中のペインブロッカー調製の業務量の割合を調査した。

結果：アンケート調査からは、ペインブロッカー使用による在宅患者とその家族の QOL の向上と同時に在宅移行時の指導を行なう病棟看護師、訪問看護師との連携の重要性が示された。また、薬剤師業務全体に占めるペインブロッカー調製の業務量の割合はわずかなものであった。

考察：薬効、動態、配合変化等の知識と無菌操作を要する専門性と衛生面を考慮した環境を要するペインブロッカー調製に関しては薬剤師が行なうことが必須であるが、薬剤師業務としての保険請求が出来ないため収益性は非常に低いのが現状である。しかし、当院薬剤部では、患者・患者家族の満足の為に処方医、病棟看護師、訪問看護師とのチーム医療の中で今後も積極的に緩和医療に関り続けて行きたいと考えている。